

犬の如く走り、或は狼の如く略奪戦を用意してゐる人間世界は其戦ひを超越した静安の福音をさへ求めてゐる。それほど此世は戦ひに満ちてゐる。それほど戦ひに疲れてゐる。『Au-dessus de la mêlée』を公けにして絶対平和を提唱したロマン・ロオランこそ実に此間の消息を明知した一人である。

然るに此平和の使徒ロオランは、革命戦の驍将クロボトキンに慈父の如くに尊び其受けし感化に感謝してゐる。蓋しクロボトキンほど平和静肅に長き戦ひを続けたものは稀有だからであらう。

平和の宣伝者であつたトルストイが常に心中の戦ひに苦んだに反して革命戦の闘士たるクロボトキンは常に光風霽月せいげつの如き平和の心の持主であつた。そして其平和を渴望する苦闘の心裡にも戦闘を喚起する和平の心裡にも、ともに止み難い人類愛のインスピレーションが漲つてゐるので、其の鉄筆の影を追ふて絶大の芸術が生れ、其足跡の及ぶ処、必ず人生の詩が遺されるのである。

大きな詩、大きな芸術が生れるには、鮮血に塗れた長い長い苦闘が戦はれねばならぬ。愛の為に、人類愛の為に。

チエルケソフを憶ふ

一 チエルケソフの名

日本の新聞紙は歐洲電報によつてチエルケソフの計を伝へたとの事である。私は、欧羅巴ヨーロッパの友人から未だ何の通知にも接せず、新聞電報の記事も読まないが、友人延島英一君から其事を聞いて、且つ驚き、且つ惜しんだ。チエルケソフの名は、例の『共産党宣言』の種本』一件以来、日本の社会思想家の間には可なり知れ渡つた様に思ふ。チエルケソフといふ名はたしか本名では無いと思ふが、其本名を私は今記憶して居ないし（エリゼ・ルクリュがクロボトキンに送つた手紙に、チエルケソフを Varlaam と呼んで居るが、之れが果して幼名であるか又は姓であるか今判明しない）、又西欧諸国ではチエルケソフといふ名が既に普及して居れば、私は矢張り此名を用ゐる。

二 カラコゾフ事件

チエルケソフはコオカサスの山の南、シオルジャ国の貴族の子としてチフリに生れた。其誕生はクロボトキンより五六年の後にあると思ふ。併し其革命運動への更生は、クロボトキンの其れよりも、ずっと以前である。彼は伝記を書かないから、精確には云へないが、私は彼がカラコゾフ事件に連坐したことを彼自身から聞いたことがある。カラコゾフの皇帝狙撃事件は、一八六六年の事で、露国皇帝に対する最初の計画であつた。此年代には、クロボトキンは尚ほ西伯利亞に軍隊生活をして居たのである。

彼がカラコゾフ事件に関係した時分には、彼はモスクワの陸軍兵学校に在学中であつた。そしてまだ十七八歳の青年であつた。此年少の故を以て其事件が極めて重大で、カラコゾフ自身は死刑に処せられたに係はらず、チエルケソフは尚ほ難を免れることを得たのであらう。

一九一四年六月頃、私が白耳義ブルツセルの、ポオル・ルクリュ翁の家に寄宿して、労働生活を営んでゐる時であつた。同市に人權聯盟大会が開かれ、チエ翁は此大会に、シオルジャ人民を暴圧する露国ツァールの政府に対する抗議を提出すべく、態々倫敦から渡航して来た。そして同じルクリュ家に二三日宿泊して居た。其大会には私も連れて行かれ、夜十二時過ぎに帰つて来た。私は、朝五時前

に起きて自分一人で食事を済まして労働に出かけることになつて居るので、チエ翁は頻りに私に同情し、「明朝は僕が起してやるよ、安心して眠りたまへ」と言ふ。其時だ、私は例の皇帝狙撃者カラコゾフが一週間睡眠禁止の拷問にかけられ、椅子に坐し、身体を動かしながら睡眠したといふ、クロの自叙伝(?)中の物語を引出して、「今日一夜の睡眠不足は何でも無い」と応じた。すると、チエ翁は「オ、！ 其様な事を知つてるか！ 其カラコゾフは実は僕の友人で、私もあの時は捕つたのだ」と感慨無量の態であつた。傍に居たルクリュ翁は其歴史を知らなかつたと見え、チエ翁から種々と談られて頗る興味がつて居た。

三 『共産党宣言』の種本』

一九一三年十月私は欧羅巴に於ける最初の生活地たるブルツセルを去つて、倫敦郊外に皿洗生活をする事になつた。其時私はルクリュ翁から、クロボトキンとチエルケソフとの二人への紹介状を貰つて行つた。然るにクロ翁は倫敦から離れたクロイドンに住居し、且つ其当時健康が勝れないことを聞いてゐたので、遂に、訪問の機会を得なかつた。之に反し、チエ翁は倫敦に生活して、頗る元氣でもあり、單純な親しみ深い人であつたので私は翁を訪問するのを楽しみにした。其折りの事であつた、チエ翁が其自著『社会主義史』(『共産党宣言』の種本)は其一部分である)を私に与へて、マルクスとエンゲルスとの不正直者であることを説かれ、殊にエンゲルスは學問に不忠実な剽窃の常習者だ

とまで熱論された。

『共産党宣言』の種本』に対し、平井新といふ人がカウツキイの弁駁を翻訳して、『三田学界雑誌』に公けにしたことを二三日前になつて私は知つた。まだ精読して見ないから、平井氏の意見は判らないが、カウツキイの議論だけではものにならない。カウツキイの議論は如何にも苦しい所謂三百代言式の強弁である。カウツキイの強弁に対してはチエ翁の反駁が露語版に載つて居る。長大雄篇である。(チエ翁の反駁は水沼熊氏が露語より翻訳され、今私の机上にあるが、余り長くなつて本追悼文には不適當故後の機会に公にしたい) 尚ほ『共産党宣言』が大体に於て、ユトビヤ社会主義からの借り者であることは、博識を以て聞えたジョルジ・ソレルも其著『La décomposition du marxisme』(1910)中に明言して居る。更に最近 Sinkovitch 氏は『Marxisme contre Socialisme』(1919)といふ可なりの大著を公けにしてチエ翁の主張に裏書して居るばかりか、更に多くの批評を付加して居る。クロボトキンが其著『無政府主義と近代科学』の末尾にチエルケソフの主張を承認して居ることは、茲に記入する必要も無い程のことである。『Karl Marx: L'économiste, le socialiste』の著者にして、博学の名声あるアルチュロ・ラブリオラが称揚し、ソレルが更に之を承認した所の、剽窃論は、今改めて私の様なものが、贅言を弄するまでもあるまい。単に無政府主義者の感情的中傷論とけなすべく、ラブリオラもソレルもシムコビツチも余りに世の信用を得た学者である。殊に此三人とも無政府主義者に非ざる社会主義者又は学者であることを知らば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。私は平井氏が、カウツキイの文章だけによつてチエルケソフ等を非難する前に、先づチエ翁の反駁や、ソレル、

ラブリオラ、シムコビツチ等の著書を一読して下さなかつたことを遺憾とする。私は倫敦の陋舎に貧苦の中にあの清らかな光榮を荷つて永眠せるチエ翁の為に唯だ此一言を附記するに止める。何れ私自身の『共産党宣言』の批評を世に公けにしたいと思ふ故に、詳細のことは其機会に譲る。『共産党宣言』がいかに、つぎはぎのもので、前後支離滅裂して居ることは誰でもあれを一読するものに氣の付くことで、従つてそれが他人のものを借用したのぢや無いかと自ら思ひ当るのである。併し、マルクスもエンゲルスも当時尚ほ若い功名に燃えて居た時分のことであるから無理も無い。エンゲルスの如きは他にも大きな剽窃があるとのこと、チエ翁が剽窃の常習犯と罵つたのも道理である。

四 欧洲大戦

私は一九一三年から一四年にかけて、半歳余を倫敦郊外に費やした。然るにルクリニ翁其他の同志から招かれて再び恋しいブルツセル市に帰つて労働生活することになつた。其折である、私がルクリニ家に止宿することになつたのは、其折である、チエ翁がカラコゾフ事件の追懷談をしたのは。

それから間も無く、あの欧洲大戦が勃発した。ルクリニ翁夫婦は独軍重囲の中を辛うじて仏国に落ち延びた。黄色人種の私は、とても其機会が無いのでプ府に籠城することになつた。恐ろしい危険に取巻かれて今日顧みると、ぞつとする様な境遇に七ヶ月を過した後、一九一五年一月下旬、私は白耳義を出奔することになった。そして、和蘭を経て英国に渡航して、最初に訪ねたのは倫敦のチエ翁で

あつた。一人の若い日本人を伴ふて、ケンチシ・タウンの翁の長屋住居を訪ふた時、翁夫妻は飛びたつばかりに喜んでくれた。翁の紹介で兎も角も一週間滞在の予定で、小さなアパルトマンを一つ借受けた。そして其間に仏国に於ける諸友人の消息もチエ翁から聞くことが出来た。折よくも倫敦に来て居たカアペンタアにも会へた。曾て七ヶ月寄寓したクレメント家をミドルセクスのライスリツプに訪ふことも出来た。何くれとなく、翁夫妻の世話になつて、一週間も夢の間に経過した。そして私は再び海峡を渡つて仏国へ落延びることになつた。

其後、翁は露国の革命を助くべく老軀を提げて故郷ジョルジャに赴いたのであるが、ポリチシヤンのボルシエビキ軍に逐ひまくられて危うくも身を以て再び西欧に脱走することになつた。丁度其当時、私はアフリカ^{アフリカ}に行き、日本に帰り、颯^{やぶ}て再び渡航することになつた。併し私は何時も少しの時間の隔りでチエ翁と会見の機を失つた。故国ジョルジャに赴いた際に翁が受けられた苦難の状はルクリユ老人や、義兄弟のホルネリセン（無政府主義者にして経済学者として有名なコ氏の夫人はチエ翁夫人と真実の同胞である）から具さに聞いては居たが、翁とは遂に会見するの機が無かつた。今にして思へば、あの白国脱出の際に、倫敦で厄介になつたのが最後の記念となつた。

翁は身長も低くて、瞳も頭髮も鬚髯も黒く、吾々東洋人と其相貌が酷似してゐたので、私には特に親しみ深く感じられた。其名も自らチエルケソフと称した程で、チユルク人を以て自任したのであり。ジョルジャは太古バビロン帝國の文明を直継した国として、其周囲の諸国と全然異なつた国語と

文字とを持て居る。同国の歴史家はジョルジャは古代のヒツチト民族の後裔だと言つてゐるが、私は日本の古事記神話に現はれた天孫民族が矢張り此ヒツチト民族であると信ずる処から、又一層チエ翁を懐かしく想つて居た。私は、チエ翁を介して幾人ものジョルジャ人に会したが、其大半が吾々と同様な眼色毛色の持主であつたことは不思議なほどであつた。又翁の一友人は、日露戦争の際、世界に伝へられた日本軍人の姓名が、多くジョルジャ人の姓名に酷似してゐるのに驚いた、と言つてゐた。

チエ翁は西欧に再亡命してから、ジョルジャ民族に対するボルシエビキの暴戾残虐を世に訴へることを怠らなかつた。翁は故国の為に恨を呑んで世を去つたであらうが、併し、常に純潔な労働と赤貧な生活を完うして、清教徒的の戦ひに生涯を捧げたる身の栄光を省みて、豊かなる安心の大往生を遂げ得たことであらう。唯だあの虚弱な身を以て自ら労働に従ひ、けなげにもチエ翁の生活と事業とを助けて来た同夫人の心情はどんなであらう。私は之を慰むべき言葉をも見出し得ない。

最後に一語を附して置く。チエ翁著『Précurseurs de l'internationale』は一八九八年頃の発行であるが、当時世の賞讃を博したものである。『社会主義史』と合せ読めば、翁の研究の如何に精にして深なるかが分るであらう。

〔追記〕 何故にボルシエビキは、ジョルジャ自治主義者に対して残虐を極めるか。それは同国東海岸（カスピヤン海の）にあるバクの大石油坑を同民族から奪つて、之を米國資本家に譲渡する為であつた。バク石油坑は世界最大石油の一に数へられ、之をジョルジャ民族の自由に委するはボルシエビキの忍びざる処であつたのだ。